

# ほなひ歴史通信

第78号

2016. 3. 1

本物に触れるということ

毎年一月から三月にかけて、筆者の勤務する水戸市立博物館内に子供たちの元気なはしやぎ声が響きます。小学三年生社会科の「昔の道具とくらし」の単元に合わせた体験学習です。火のついた火鉢やこたつにあたり、自分のハンカチにアイロンをかけるなど道具を実際に使用する、水戸市立博物館オリジナルの講座です。体験メニューが、①暗い部屋での行灯や和ろうそくなどのあかり体験、②火のし、炭火のアイロン体験、③洗濯板とたらいを使用した洗濯体験、④火鉢、ねここたつ、湯たんぼの暖房体験、⑤箱膳、ちゃぶ台、すり鉢、菓研の食に関わる道具体験、⑥昔の黒電話の体験、⑦障子の掃除体験、など多岐にわたるため、小学生は昔のくらしの色々な場面を経験することができます。



ごぞの上の体験コーナー

所蔵されている大切な資料を未来に伝える

ということ、博物館、そしてその専門家としての学芸員の重要な使命です。資料が傷んでしまう環境で保管、利用することはタブー視されています。しかし、水戸市博での体験学習では、民具資料が壊れてしまうことも覚悟の上で実際に利用してもらって

います。

各家で大切に使用され、残されてきた資料は、所蔵者の代替わり、家の増改築・移転、大掃除などを契機に処分されています。その一つ一つが私たちの暮らしの重要な証言者であり、守るべき資料でもあります。それでも、これらの資料をなぜ守るのか、どのように活用し続けるかがわからないままでは、保存することの意義を理解してもらえません。

そのような状況であるからこそ、文化財はもつと触れられ、利用されるべきだと筆者は考えています。資料を単なる物としてではなく、利用対象として向き合ったことよって、資料の背後に垣間見える生活文化を感じることが出来ます。体験学習後に博物館に遊びに来た児童から、「あの道具を触ったことがあるよ」「昔のアイロンは少し重いんだよ」と話しかけられることがあります。その度に、実際に資料を利用する体験が心の一部にでも残って、残っていることを感じ、文化財に関わる機会を持つことの意義を確信させられます。

大子町にも、多くの文化財（考古資料・古文書・民具・美術品・建造物や史跡等の実物資料から祭礼や習俗など無形の民俗資料等を含む）が残されています。しかし、ライフスタイルの変化とともにそれらに関わる機会は徐々に減ってきています。祭礼や伝統産業の担い手不足も深刻です。文化財を保存し記録として将来に伝えるだけではなく、それらに触れる機会を作り、その背景にある生活文化を多くの人に感じてもらうことが今求められています。歴史資料を利用する視点から、町内外の人々に文化財と触れ合う機会をつくるお手伝いをしていきたいと強く願っています。（藤井達也）



火のしをかける

## ふるさと歴史講座「大子の山城」と現地巡り

今年度のふるさと歴史講座は、大子町文化財保護審議会とのコラボレーション企画として、最近注目の集まっている「山城」をテーマに座学と現地巡りの二回一セットで、大子の山城の見方歩き方の初歩を学べるような講座を実施しました。

座学としての講座は平成二十七年十一月二十八日の午前10時から正午までの時間帯で、中央公民館の講堂にて行いました。

座学は「大子のお城について」というテーマで地図の見方、書き方、城の構造、地形からどう城を読み取るかを大子町文化財保護審議会委員長の阿久津久氏を講師に迎え、レジュメとスライド画像を用いながら解説していただきました。この日は四四名の受講生が参加し、講座修了予定時刻を過ぎても熱心に質問されました。

十二月十二日、座学に参加した受講生の中から二〇名の方が現地巡りに参加しました。大子町公用バスを使用して阿久津先生の案内のもと町内五方所の山城、館跡等を巡りました。

午前九時に中央公民館を出発し、頃藤城跡、頃藤古館跡を見学し、広域公園で昼食を取りました。午後は町付城跡を散策し、荒蒔城跡へは険しい山道を登り、最後は依上城跡を巡るとい盛りだくさんの内容でした。

素人の私には遺跡地図と現地を照らし合わせるだけではなかなか城が見えてこなかったのですが、阿久津先生から「その窪みが堀の跡だ」とか、「あの盛り上がった部分が地図でいう廓の跡だ」という解説を聞いたとたんに、見えなかった城跡が見えてくるようになるのがとても不思議で驚きました。地図の見方や現地に行つて地形を読むコツを掴めば、私でも理解できるというのが面白く、もつと学んでみたいという気持ちになりました。



土塁がきれいに残っている頃藤古館跡



地図を見ながら解説する阿久津先生



頃藤城跡からの眺め



荒蒔城跡への山道を登る参加者

来年度も、今回歩くことが出来なかった月居城跡を中心に現地巡り講座を企画していきたいと考えています。将来は、町民の皆さんが講座から学んだことを活かし、皆さん自身で山城を調査し、分かったことを発表し合うとともに、まちづくりや文化財保護に活かせるようになればいいと思います。地域の歴史を、様々な角度から皆さんと一緒に掘り起していければ、と願っています。

(家田 望)

## ふるさと歴史講座「現地巡り」に触発されて

吉成恵子

故郷の歴史の一端を学べることに興味を抱いて参加した今回の講座は、城跡に関する現地巡りが主で、違った角度で故郷を再認識できた収穫は大きいものでした。

まず前回の講座で、大子町には頃藤古館跡、頃藤城跡、町付城跡、荒蒔城跡などを含めて三〇箇所城館跡があり、それぞれが役割を持っていたことを知り得て、大変心が動き、興味を持ちました。

そして、次の講座において現地巡りが敢行され五箇所の城館跡を巡りましたが、中でも私が「依上」出身という事もあって依上城跡に興味深々。ここで腰曲輪、土塁、堀などを見て回りましたが、山の上までは行けませんでした。

そこで、山の上がどうしても気になって頭から離れず、後日一人で、降雪により折れた竹藪を掻き分け山の上に行ってみました。そこは、老夫が語ってくれた小室氏の内神様という祠があり平坦な場所でした。藪の中を見下ろせば池のようなものが見え、何だろうと思いましたがそこまでは行けず諦めました。昔の水堀だったのでしようか。

これら遺構の簡単な踏査のみで、当時の城などの様子を明確に確認するのは困難でしょうが、少しでも当時の様子を知りたい思いが益々強烈になり、復元などに協力できることがあればお手伝いしたいものだと思うようになりました。

故郷の歴史に際限なく引き込まれていく私の心は、生まれ育った地における、いにしえの人々との深い関わりを持ちたいと望む心、ひいては、人とのコミュニケーションの広がりを感じたいと望む心のものなのかもしれません。このふるさと歴史講座を機会に、人の心にも触れる歴史探訪のあり方を、生涯を通じて心がけて勉強してみたいと思います。

(大子町大字矢田在住)

## 現地巡りは楽しい

― 第四回ふるさと歴史講座(現地巡り)に参加して ―

都筑 均

歴史好きが高じて、最近郷土史に関心が向いて来た。その結果、十一月二十八日に開催された「大子のお城について」に参加した。その講座の中で大子に三〇の城が存在し、その中の一山城「和田城」が自宅からわずか百数十米の所に所在した事は予期しないことで少なからず驚いた。現在は、「真弓神社」(創建八〇年)となっている。また山城は、狼火台の役割も果し、その情報の正確さはモリス信号に匹敵し、伝達時間は、大子から常陸太田市迄一時間数十分で到達した事は、驚異的なスピードと感心した。その経過の中で、興味を沸き「現地巡り」に参加申し込みをした。

十二月十二日「現地巡り」は、前日の雨も上り好天に恵まれた日に開催された。見学地は、佐竹時代に築かれた頃藤城跡、頃藤古館跡、依上城跡で、城によりハイキングの健脚コースの様相であった。印象に残った城について述べると、頃藤城跡は、三方を久慈川の高い河岸段丘に囲まれ、現在は歯科医院となり中央部を水郡線が貫いている。町付城跡は、八溝川、中郷川が合流する河岸段丘の上に所在し、スケールの大きな山城であった。いずれの城も、自然の地形を上手に利用した好適地に築かれ、更に人工的に手を加え堀や土塁や曲輪等を増設し、難攻の城である。

座学も楽しいものだが、現地巡りは「百聞は一見に如かず」、具体的にわかりやすく更に楽しい講座となった。私達の先祖は、その時代の領主から搾取され、戦乱に巻き込まれ翻弄されていたと推測される。先人が困難な時代を生き抜いてきたお蔭で、現代の私達が存在する。その足跡を訪ねることにより、先人の苦勞に対し敬意を払うと同時に、改めて感動を覚えた。ふるさと歴史講座に対する関心が深まり、今後も機会を捕え参加して行きたいと思う。

(大子町大字浅川在住)

## 大子町産出の化石の紹介(下の二)

笠井勝美

化石とは、過去の生物の遺体と遺跡が地層中に保存されたもので、石油や石灰は除外すると定義され、当然動物の足跡や糞も化石に含まれます。大子町を中心とした奥久慈地方は、「ゾウ類やシカ類」などの足跡や、ステゴロフォドン象の化石などの大発見が続き、今後も県内では最も化石発見が期待されている地域です。

### (一)大沢川河床のシカ類の足跡化石(図一)



図1 シカ類の足跡化石

平成十六年(二〇〇四)五月、茨城大学田切美智雄教授によって、大沢川の入口の河床から、多数の足跡化石が発見されました。化石は大沢川凝灰岩部層の層理面に沿っており、一三〇個を超えるシカ類の足跡でした。

大沢川凝灰岩部層は、高温の火砕流や火山灰が堆積した地層で、噴出源は栃木方面と考えられています。化石は河床なので、発掘して茨城県自然博物館に保管されています。シカの骨化石は、上小川駅西方の崖と上金沢の押川河床で

も発見されています。

### (二)浅川の石灰層珪化石(図二)

浅川には浅川層中部層が分布し、湖沼などに堆積した樹木が地

圧や地熱によって炭化した石灰層があります。大子町域には、茨城県側の常磐炭田地区以外では唯一の浅川炭鉱がありました。また旧浅川小学校付近では珪化石が産出し、旧浅川小学校(現ルネッサンス高等学校)の門柱は巨大な珪化石から成り、元の場所に残存しています。

### (四)西金北沢のゾウ類の足跡化石(図三)

平成十五年四月、筑波大学大学院生永戸秀雄氏によって、西金北沢の浅川層中から二地点で一二个のゾウ類の足跡化石が発見されました。東日本で最初の大発見でありました。沼地のような陸地のやわらかい場所を歩き、その後洪水などで砂が運ばれて埋められたことで、足跡が残ったものであると報告されました。落下してしまつた一個の足跡化石は、大子町教育委員会に保管されています。



図2 旧浅川小学校の門柱(珪化石)



図3 ゾウ類の足跡化石

## 狩野東雲景信とその作品について

東雲景信は、天保十二年（一八四二）正月二十日、江戸・金杉片町に表絵師狩野梅軒則信の三男として生まれた。金杉片町狩野家は、正徳年間に梅雲為信より始まり、梅軒富信―梅寿胤信―梅軒員信―梅雲行信―梅俊厚信―梅軒則信―梅香芳信と続く。梅軒則信が父であり、梅香芳信は兄にあたる。始祖の梅雲為信は、狩野永徳の門人狩野宗心を祖とする系譜をもつ絵師である。

さて、江戸から明治へと時代の流れが大きく変わるなかで、家禄の少ない表絵師の狩野家は幕藩体制の終焉とともに退転を余儀なくされる。三男である東雲は途方に暮れたであろう。その後どのような経緯を辿ったのか定かでないが、生家をあとにした東雲は、明治四・五年の頃には同郷の（東京府）八丁堀益子喜工門の長女うめを伴い、当地方外大野村（現・太子町大字外大野）の鴨志田信之介宅に寄留するのである。明治六年（一八七三）九月十四日には、うめを妻として入籍し、外大野において新たな出発をする。このとき東雲三二歳、すでに絵師としての技量は十分に備えていたであろう。うめは天保九年四月二日生まれで、三歳年上の姉さん女房であった。

外大野を居住地とした東雲の半生は、まさに絵師としての生活そのものであったと思われる。各家々の求めに応じて、それは即ち生活の糧を得ることもあったろうが、今に残る作品の数は現



狩野東雲景信筆  
「七福神図」（明治32年）

在までの調査で、生瀬地方の外大野、大生瀬、高柴に限っても五〇数点にのぼる。また、矢祭町においても調査がなされており、それによると宝坂や上関河内、下関河内地域でやはり五〇点近くの作品が確認されている。今後調査が進めばさらにその数は増すであろう。東雲の作品でもっとも年代の遡るものは、矢祭町関岡芝坪に所在する明治五年制作の「中島藤右衛門図」である。生瀬地方に残る作品では明治九年の「恵比須大黒図」や「菟蓐図」が初期のものであるが、以後明治十年代から三十年代末まで東雲の活躍期のほぼ全体を通して作品をみる事ができる。作品は、「七福神図」、「恵比須大黒図」、「山の神図」、「淡島図」、「中島藤右衛門肖像こんにやく図」など民間信仰に由来するものが多いが、ほかにも「肖像画」をはじめ「十三仏図」、「菅原道真図」、「文殊菩薩図」、それに「龍図」、柱掛けとして松板に描いた「牡丹に唐獅子図」、「竹に虎図」などがある。これらの作品からは、当時の人々の生活に密着したものを求めに応じて描いていたとみることができよう。また、明治二十一年には翌二十二年に施行される市制・町村制に伴う各村の字図が作製されたが、東雲も高田村、下野宮村、外大野村などの字図を製作している。これは、東雲が絵師として当時一般に広く知られていただけでなく、村役場などにも認知されていたことを物語っている。ともあれ、東雲の作品の多くが、たとえ地域の求めに応じたもの、また生活の糧として描いたものであるにせよ、その一つ一つの作品には力強さと確かな完成されたものをみることができのではないだろうか。そこには、表絵師としての伝統と、そして画人としての誇りが感じられるのである。

東雲は、明治四十一年（一九〇八）八月一日不帰の客となった。享年六七歳の生涯であった。妻うめは、それより前の明治三十年二月十二日に五八歳の生涯を閉じている。（本稿は、平成八年開催の「狩野東雲展」パンフ掲載文の一部を書き改めたものである）（井上和司）

## 依上地区、ある農業青年の挑戦物語（上）

―特産品・りんごのルーツを探る（三）―

旧生瀬村の黒田一さん、宏さん父子から始まった大子地方でのりんご栽培は、昭和三十年代を通して大子町内に急速に広がっていくものの（本誌第七五号参照）、その展開過程は一様ではなかった。大字芦野倉（旧依上村）でりんご園を営む木澤源一郎さんの証言（平成二十八年二月二日ヒアリング）を元に、一人の農業青年がりんご栽培を志し、幾多の困難を経ながらも経営として成り立たせるまでの、まさに苦闘の過程を跡付けてみよう。そこからは、りんごに賭けた先人のまた別の姿が見えてくると思えるからである。

昭和十三年生まれの木澤さんとりんごとの出会いは、大子一高時代にまでさかのぼる。高校二年生の時に、学校が希望者にりんごの苗木を斡旋した。品種は、もちろん早生りんごの旭と祝である。普通科の学生であったが、生瀬で黒田さんという人がりんごをつくっていることは知っており、高価な果物でなかなか食べられないりんごを自家用にいくらかでも収穫できたらいいと考えた木澤さんは、旭と祝をそれぞれ一本ずつ購入し、畑の隅に植えた。苗木は、その後とくに手入れもせず植えっぱなしにしておいたようだが、これが、りんごとの長い付き合いの始まりとなる。

大子一高を卒業した後は内原町の鯉淵学園で二年間学び、昭和三十四年三月に卒業する。農業改良普及員の資格をとったものの結局長男として家業の農業を継ぐことになるのだが、従来の米作とコンニャクを軸にした農業経営には限界があると考えた木澤さんは、他方で、鯉淵学園で学んだ「七桁農業」つまり年収百万円の新しい農業を実現するにはどうしたらよいかを模索していた。

卒業して帰郷した三月、木澤さんは「黒田さんとこへ真っ先に行ったんです」と回顧する。りんごという新たな作物への関心も

さることながら、黒田宏さんに嫁いだたか子さんはかつての依上小学校の恩師でもあったため「たか子先生がいるからと思って行きやすかった」事情も重なったようである。迎えてくれたのは黒田一さん。「中にどうぞ、どうぞと言って案内してくれて、りんごづくりの話を一日じっくりしてくれた」。その様子を、次のように語っている。「一さんて方は非常に穏やかに話してくれたんですが、何て言うか、りんごづくりが楽しくて楽しくてしょうがないっていう感じだったんです。春に芽が出て花が咲いて、そして摘果したり袋をかけたたり、それを眺めるのが楽しくて、また秋になって実が成って収穫できる。収穫が終わってからは、来年の芽が早く出ないかなっていうのを楽しみにしてんだって。一年が回ってくるのが待ち遠しいんだと。とにかく楽しそうだったんですよ。りんごづくりはこうなんだと教えてくれて、是非やりなさい」と。その当時、弱冠二〇歳の木澤さんの脳裏にあった農業像は、「米づくりにしてもコンニャクにしても、地べたを這い回って雑草と闘いながら汗を流し、汗を流しやって、その割に報酬は得られない。体を酷使しても最低の生活しかない」、というものであった。しかし、こうした農業像とは異質の一さんの話は、若き農業青年に鮮烈な印象を与え、その心をとらえた。「私もその話を聞いて、ようし、りんごをやるうと思つた」と言う。これまでとは違う目指すべき農業の方向がみえてきた瞬間であった。

この頃、依上地区ではすでに斉藤一郎さん、菊池敏雄さん、木澤良夫さんから何人かの先輩たちがりんご栽培に着手していた。いずれも収入源としての酪農と組み合わせ、牧草地に植えた苗は「かなりいい木に」育っていて、「販売は確かになかったんですけど、木はいっぱいあった」。しかし、りんごを「売って生計が成り立つようなことにはならないだろう」と誰もが思い、周囲の目は冷ややかだったと言う。現に、木澤さんの両親も反対だった。「説得しても聞いてくれない」なかでの出発であった。

（齋藤典生）

昭和七年版 大日本商工会編纂の『大日本商工録』から

昭和七年(一九三二)発行の『大日本商工録』は、「本書ハ商工業者ヲ主トシ一般ノ營業者ヲ網羅掲載セリ、掲載事項ハ各其ノ營業種別ヲ分類シ氏名ノイロハ順ニヨリ掲載セリ」と全国各地の商工業者を編集している。そこには、大子町域の二三營業種別の五三店が記されている。なお、その内の四〇店が大子町内である。

呉服太物洋反物類業は、竹之内道之介(生瀬村)、外池太一郎(大子町)、内田呉服店(大子町) 創業明治四十四年 店主内田九兵衛)、樋口佐平(大子町)、島崎呉服店(大子町) 店主島崎善平) 繭糸屑物業は、内藤七兵衛(大子町) 創業明治三十九年) 洋品雜貨業は、大金弥一(大子町)、植田幸七(大子町) 創業明治二十五年) 和洋雜貨)、助川百貨店(大子町) 店主助川龜四郎) 洋品 小間物 文房具 陶器 雜貨) 薬品売業業は、金沢勇藏(大子町)、野内得二(里仁堂) 大子町) 創業明治十五年) 薬種 売薬 文房具 書籍 化粧品) 電灯電力供給業は、袋田電灯株式会社(袋田村) 専務前島平) 金物類業は、十一屋商店(大子町) 益子有造)、樋口順一(大子町) 荒物日用雜貨(畳表類)業は、大金鉄吉(大子町)、神長子之吉(上小川村)、島根広(大子町) 諸材木製材業は、星健次郎(佐原村)、歌川定之介(大黒屋) 上小川村) 創業大正九年) 製材 木材卸)、益子合資会社(大子町)、清水勇藏(上小川村) 桶類(製造)業は、石田なつ(大子町) 薪炭業は、小野瀬忠吉(大子町) 薪炭問屋) 米雜穀精米業は、岡崎俊太郎(大子町) 米穀雜穀白米問屋) 精米)、阿部秀一(宮川村) 蒟蒻粉楮類業は、磯吉三郎(大子町) 創業明治四十三年) 蒟蒻粉) 白楮問屋)、仁平五郎左衛門(上小川村)、大藤保(大子町)、川

口利吉(大子町)、松浦重太郎(大子町) 創業明治十九年) 蒟蒻粉白楮問屋)

和洋菓子類業は、山林堂(大子町) 店主鈴木末之介) 菓子製造) 名産鮎煎餅) 栗羊羹) 保内雪) 乾物保存食料品業は、黒崎松五郎(大子町)、小林寅三郎(白子屋) 大子町) 創業明治三十三年) 乾物)、小林庄藏(林屋) 大子町) 創業明治四十四年) 海産物) 乾物) 洋酒) 缶詰卸) 家畜売買(仲立)業は、寺田直三郎(依上村) 和洋酒類業は、大丸商店(辻正次) 大子駅前) 酒類) 醤油) 味噌) 洋酒) 缶詰)、山田久次郎(大子町) 醤油味噌業は、神賀徳次郎(上小川村) 酒類醸造業は、石井覚一(大子町)、永瀬酒造店(大子町) 店主永瀬三四郎) 清酒さわやか醸造元)、齋藤秀之介(生瀬村)、菊池一也(宮川村)、鈴木市郎(生瀬村) 旅館業は、栄屋旅館(大子町) 創業明治二十一年) 店主海野新次郎) 旅館) 料理) 和洋料理業は、保里川(大子町) 創業昭和二年) 店主堀川くに和洋料理)、堀井新藏(大子町) 飲食店業は、高安徳五郎(大子町)、野内ナヲ(大子町)、益子さん(大子町)、鈴木卯平(大子町) 自動車輸送業は、常野自動車(大子町) 運送回漕貨物取扱業は、常陸大子合同運送株式会社(大子町) 設立昭和二年) 社長川口利吉)、菊池武保(大子町) ここでは、呉服・洋品業は八店、蒟蒻粉楮類業は五店、旅館・料理・飲食店業は七店あり、昭和二年の常陸大子駅前業の時期には合同運送株式会社が営業している。『大子町史資料編下巻』には、昭和三年「大子町市街全図」が掲載され、店舗名が記されている。それと対比し、昭和七年当時、大子町域にはどのような商工業者がいたのかを考えることができる資料である。(野内正美)

## 大子町の文化遺産を活かすシンポジウム

平成二十八年二月十一日に大子町の文化遺産を活かす第六回シンポジウムが、大子町文化福祉会館「まいん」にて行われました。このシンポジウムでは、大子町文化遺産活用実行委員会に所属する各団体が、国からの補助を受けて取り組んできた三年間の活動報告を行いました。

当実行委員会は、平成二十五年三月に行政、住民、文化財保護団体等が協働して我が町の多様で豊かな文化遺産を活用し、それに関する情報発信、人材育成、普及啓発、継承、記録作成、調査研究など地域の特色ある総合的な取り組みにより、文化振興とともに地域経済の活性化を推進することを目的に設立されました。



シンポジウムでは大子郷土史の会の邑のまつり調査、東京芸術大学が行った大雲寺観音堂・袋田の滝四度の滝不動尊調査、茨城県建築士会へリテイジマネージャーによるまちうちの歴史的建造物調査、もば建築文化研究所による大子町の屋台・山車調査とコンニャク調査、木の文化塾による木の文化を活かす活動、中田植保存会による中田植の町指定をうけての活動、浅川のささら保存会による浅川のささら祭祀準備についての活動、観光ボランティア大子による観光ボランティア育成講座等の取り組みについての報告がありました。当日は一二〇人を超える来場者があり、会場は

熱気に包まれていました。

活動報告後、元文化庁文化財部伝統文化課主任調査官の菊池健策氏、学習院大学非常勤講師の山崎祐子氏、大子町文化財保護審議委員会委員長の阿久津久氏からそれぞれの活動についての感想、今後の展望についてのアドバイスをいただきました。

会場では来場者へアンケートを行い、大子町の文化遺産を活かすために自分が関わられること、今後次の世代へ何を残していくべきかを参加者全員で考えました。

同時に、今まで発行した調査報告書や、まちうちの歴史的建造物の特徴、大子町の屋台についての紹介、常陸大子のコンニャク生産用具及び加工用具の紹介などを目で見て分かるようパネルにし、「まいん」内の観光展示コーナーにて一週間程度展示を行いました。展示中にも来場者に対して情報収集のためのアンケートを行いました。特に調査中の大子町のコンニャク生産については貴重な情報をいただき、後日調査に伺うことが出来たり、コンニャク栽培用具の呼び方についても地区で違うことが分かったり、把握していなかった呼び名を知ることが出来たりと、大きな収穫が得られました。今後はこれまでの活動を無駄にせず、活動の成果をまとめてどう活かしていくかを考えていかなければなりません。(家田 望)

### 編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生 (大子町歴史資料調査研究員)

野内 正美 (大子町歴史資料調査研究員)

井上 和司 (大子町歴史資料調査研究員)

藤井 達也 (大子町歴史資料調査研究員)

齋藤 仁司 (大子町教育委員会)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館 ☎ 0295 (72) 1148